様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 24 年 6 月 12 日現在

機関番号：21301
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2009～2011
課題番号：21792181
研究課題名（和文）ソーシャルスキルズトレーニングを用いた看護学生のコミュニケーション教育の有用性
研究課題名（英文）Effects of communication education based on social skills training on nursing students
研究代表者　阿部 智美（TOMOMI　ABE）
宮城大学・看護学部・助教
研究者番号：70347201

研究成果の概要（和文）：本研究は看護学生が患者とのコミュニケーションを学ぶために、SST（Social Skills Training　以下、SST と略記する）の技法を用いたコミュニケーション教育を行い、その有用性を明らかにすることを目的とした。初年度は、SST のリーダー研修と看護師、看護学生を対象とした SST の文献検討からコミュニケーション教育計画を立案した。次年度は、看護学生へ SST の技法を用いたコミュニケーション教育を実施し、グループインタビューからその効果を調査した。最終年度には、グループインタビューと質問紙から、話題提供者とグループメンバーの役割の違いによる SST の技法を用いたコミュニケーション教育の効果が明らかになった。

研究成果の概要（英文）: The purpose of this study is to clarify the effects of communication education based on social skills training (SST) on nursing students who learn how to communicate with patients. In the first year we drew up a communication education plan by undertaking SST leadership training and conducting literature review on STT for nurses and nursing students. In the second year we conducted communication education based on SST for nursing students and analyzed its effects through a group interviews. In the last year we examined the contents of group interviews and returned questionnaires, revealing the effectiveness of communication education based on SST techniques by the role difference between topic informants and other group members.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	200,000	60,000	260,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	100,000	30,000	130,000
年度			
年度			
総　計	800,000	240,000	1,040,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学
キーワード：　ソーシャルスキルズトレーニング、看護学生、コミュニケーション

１．研究開始当初の背景

看護学生のコミュニケーション教育に対する強化が求められている。平成 21 年度のカリキュラム改正にもそのことが明示された（厚生労働省医政局看護課，2007）。その背景として、近年の若者と同様に、看護学生のコミュニケーション能力の低下があげられている。看護学生のコミュニケーション能力の向上のためにコミュニケーション教育の検討が必要である。看護基礎教育では、講義

や演習で知識、技術を得て、臨地実習の経験を通して看護のコミュニケーションの学びを深めている。また、看護学生が患者とのコミュニケーションを困難に感じる要因については、対象の理解不足や対応方法がわからない、消極性、自信不足といった態度などが示されている（石井，2007，岩脇他，2007）。そのため、コミュニケーション教育は看護学生が難しいと感じた患者とのコミュニケーション場面を取り上げ、対象理解を深めながら、対応方法を学んでいく方法が考えられる。

そこで、本研究では SST（Social Skill Training　以下、SST と略記する）の技法を用いたコミュニケーション教育に焦点を当てて検討する。SST は対人関係技能を改善し、自己効力感を高める。SST はロールプレイやフィードバック、モデリングなどの技法を組み合わせて練習が進められる。SST では学習者と共に練習課題を決め、主にグループでその対処を考えるなど、学習者の主体性を重視し、グループの相互作用を活用する。日本において SST は精神科領域で導入され、現在では通常教育の授業などに対人関係技能の向上のために用いられている（渡辺，1996，鈴木他，1997，前田，2005，岩田他，2005，西園他，2009）。このことから、SST の技法を用いたコミュニケーション教育は、実習での多様な課題を取り上げることができ、患者への対応方法を学び、学生の自己効力感を高めることから、有用なのではないかと考えた。

２．研究の目的

本研究では、看護学生が患者とのコミュニケーションを学ぶために、SST の技法を用いたコミュニケーション教育を行い、その有用性を明らかにすることを目的とする。これまでの看護基礎教育では、SST の技法を用いたコミュニケーション技術の教育や精神看護実習でのカンファレンスが紹介されている（千葉，2001，釜谷，2002）。しかし、SST の技法を用いる効果について質的な研究はあまり見当たらない。SST によって予測される効果から量的な研究をすることはできるが、学生のなまの声から「どのような効果がみられたのか」を尋ねることで、その効果を具体的に明らかにすることができるのではないかと考える。

そこで、本研究ではグループインタビューによって、SST の技法を用いたコミュニケーション教育の効果を明らかにする。グループインタビューは対象者の「なまの声のそのままの情報」を生かすことができる（安梅，2001）。また、SST は主にグループで実施され、グループダイナミックスが活用される。そのため、グループダイナミックスを活用するグループインタビューを用いることで、より深い情報が得られるのではないかと考える。

まず、初年度には、SST の技法を用いたコミュニケーション教育計画を立案することとした。そのために、SST のリーダー研修に参加し、看護師、看護学生を対象とした SST の文献検討を行う。次年度には、看護学生を対象に SST の技法を用いたコミュニケーション教育を行い、グループインタビューから、学生が捉える効果を明らかにすることを目的とした。最終年度は、グループインタビューと前年度に得られた結果をもとに作成した質問紙調査から、話題提供者とグループメンバーの役割による効果の捉え方を明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

（1）初年度

①SST のリーダー研修への参加や看護師、看護学生を対象とした SST の文献検討を行い、SST の技法を用いたコミュニケーション教育計画を立案した。②実施後のグループインタビュー計画を立案した。③実施協力校との調整を図った。

（2）次年度

①運営協力者、実施協力校との調整を図った。運営協力者とは、コミュニケーション教育の実施に当たって、必要な打ち合わせを行った。実施協力校では、学生へ参加を募り、具体的な説明を行った。②SST の技法を用いたコミュニケーション教育、グループインタビューを実施した。③データの分析、まとめを行った。

（3）最終年度

①研究計画を立案した（教育計画とインタビュー計画の見直し、質問紙の作成）。②運営協力者、実施協力校との調整を図った。運営協力者とは、コミュニケーション教育の実施に当たって、必要な打ち合わせを行った。実施協力校では、学生へ参加を募り、具体的な説明を行った。③SST の技法を用いたコミュニケーション教育、グループインタビュー、質問紙調査を実施した。④データの分析、まとめを行った。

４．研究成果

(1) 初年度

はじめ、SST の運営方法に関する具体的な情報を得るため、SST のリーダー研修会などに参加した。また、看護学生、看護師を対象とした SST に関する研究の動向を明らかにするために、これまでに発表された国内における看護師、看護学生を対象とした SST に関する文献検討を行った。その結果、看護学生、看護師を対象とした SST の運営状況やその実施によって得られる効果など、その特徴が明らかになった。

次に、SST に関する文献、SST のリーダー研修会などで収集した情報から、SST の技法

を用いた看護学生のコミュニケーション教育計画、インタビュー計画を立案した。これらの教育計画、グループインタビュー計画は研究計画書にまとめ、倫理委員会の審査を受けて、実施の承認を得た。

SST の技法を用いたコミュニケーション教育は、以下のように計画した。実施するグループは、1 グループ 6 名程度とし、3 つのグループを構成する。実施は 3 つのグループを対象に各 1 回ずつ行う。実施時間は 1 グループにつき 1 回 90 分程度とする。運営は申請者と SST のリーダー経験者が行う。

SST の技法を用いたコミュニケーション教育は、SST の基本訓練モデルに基づいて行う（西園他，2009）。練習課題は「患者とのコミュニケーションを難しいと感じた場面」として、学生から課題場面を出してもらう。課題場面は事前提出を求め、運営資料として活用する。

実施では、最初に、自己紹介の後、ウォーミングアップとして参加者に「最近、ほっとしたこと」を加えて話してもらう。次に、実施の目的とグループのルールを確認する。今回は初回の実施であることから、宿題の報告は行わない。実施の流れとしては、以下のような順序で行う。①練習することを決める ②場面をつくって 1 回目の練習をする　③よいところをほめる　④さらによくする点を考える　⑤必要ならばお手本をみる　⑥もう一度練習をする　⑦よいところをほめる。このうち、④さらによくする点を考えるでは、患者の気持ちを考えた対応方法を出来るだけ多くあげさせる。また、今回は 1 回のみの実施であることから、実際の場面で対応方法を再現し、その結果を報告するまでは求めない。１つの練習課題を終えたら、別のメンバーの練習課題に移り、1 回 90 分で 2～3 つの練習課題を行う。

その他、参加しやすいように、実施する部屋の椅子はコの字型に配置する。また、円滑に実施できるように、グループで話し合われた内容は口外しないなどのグループのルールや基本訓練モデルの進め方、視線を合わせるなどコミュニケーションのポイントを記載したポスターを掲示する。さらに、グループメンバーで共通理解が得られるように、練習課題や対応方法などの意見はホワイトボードに記載する。

(2) 次年度

看護学生を対象に SST の技法を用いたコミュニケーション教育を実施し、データ収集を行った。18 名の看護学生を対象に 3 つのグループに分けて 1 回ずつ実施した。実施後に、グループインタビューを行った。インタビューは逐語録にまとめ、質的に分析した。

その結果、学生が捉えた効果として【課題の共有】【場面や対象の理解】【対応方法の学び】【コミュニケーションスキルの理解】【自信の形成】【不安の低減】【モチベーションの向上】【支援的な学習環境】が得られた。

これらの結果から、SST の技法を用いたコミュニケーション教育は、グループでの相互作用を活かした学習環境のもと、学習者と共に決めた練習課題から、対象理解や対応方法の学びを深め、コミュニケーションスキルを具体的に理解することができ、自信の形成によってコミュニケーション行動を促す効果も得られると考えられた。

今後の課題として、話題提供者とグループメンバーが捉える効果の比較があげられる。SST は話題提供者を中心に実施されるが、今年度の調査において、グループメンバーからも、その効果について語られていた。話題提供者とグループメンバーの役割による効果の捉え方を比較することで、学生の課題状況に応じた教育に生かせると考える。そのため、最終年度にも調査を実施する。

その他、看護学生を対象に SST の技法を用いたコミュニケーション教育を実施するに当たり、看護におけるコミュニケーションに関する教育内容・方法の分析が必要であると考えた。そのため、看護のテキストと看護のコミュニケーションスキル尺度から、看護におけるコミュニケーションスキルの分類を試みた。その結果、看護のコミュニケーションスキルの理論と技術的側面が示され、看護に特徴的なコミュニケーションスキルが明らかになった。

(3) 最終年度

実施前に、教育計画、インタビュー計画を見直し、前年度の結果から質問紙を作成した。教育計画は、学生の要望から、練習課題の記載用紙の修正等を加えた。グループインタビュー計画は、SST の基本訓練モデルの流れに沿って、学生が捉えた効果が明確になるように修正を加えた。質問紙は前年度に抽出された学生が捉えた効果から、効果について 10 項目（7 件法）を作成した。これらの修正を加えた研究計画書は、倫理委員会の審査を受けて、実施の承認を得た。

看護学生を対象に SST の技法を用いたコミュニケーション教育を実施し、データ収集を行った。実施は延べ 13 名の看護学生を対象に 3 つのグループに分けて 1 回ずつ行った。データ収集は、話題提供者とグループメンバーが捉えた効果について、実施後に、グループインタビューと質問紙調査によって行った。インタビューは逐語録にまとめ、質的に分析した。質問紙は項目ごとに集計した。

その結果、話題提供者とグループメンバーが捉えた参加しての効果、プログラム内容の効果として、以下の内容が明らかになった。

参加しての効果は、6 カテゴリーが抽出された。話題提供者とグループメンバーともに

【話題の共有】【対応方法の学び】【グループの効果】が得られた。話題提供者にのみ【コミュニケーションスキルの理解】【自信の形成】、グループメンバーにのみ【対象の理解】が得られた。

プログラム内容の効果は、24 カテゴリーが抽出された。①練習することを決めるでは、話題提供者とグループメンバーともに【話題の共有】が得られた。②場面をつくって 1 回目の練習をするでは、話題提供者とグループメンバーともにロールプレイの【2 回目と比較】が得られた。話題提供者にのみ【課題場面の整理】【課題場面の伝えやすさ】、グループメンバーにのみ【課題場面の分かりやすさ】【患者の立場の気づき】が得られた。③よいところをほめるでは、話題提供者にのみ【自分のよいところの発見】【もっと良くしようと思える】、グループメンバーにのみ話題提供者の【よいところがみえる】【肯定的な気分】【よいところに足して改善点を考えられる】が得られた。④さらによくする点を考えるでは、話題提供者とグループメンバーともに【意見の取り入れ】が得られた。グループメンバーにのみ【多様な意見の収集】【客観的な理解】が得られた。⑤必要ならばお手本をみるでは、話題提供者とグループメンバーともに【具体的なスキルの理解】が得られた。グループメンバーにのみ【皆で体験できる】が得られた。⑥もう一度練習をするでは、話題提供者にのみ【スキルが身につく】【自信につながる】、グループメンバーにのみ話題提供者の【変化がわかる】【患者の立場の気づき】が得られた。⑦よいところをほめるでは、話題提供者とグループメンバーともに【評価ができる】【肯定的な気分】が得られた。話題提供者にのみ【自信につながる】、グループメンバーにのみ【アドバイスに自信がもてる】が得られた。

質問紙調査では、話題提供者とグループメンバーともに「対応方法の広がり」「メンバーとの協力」の項目の得点が最も高かった。また、話題提供者とグループメンバーと得点に有意な差はみられなかった。

これらの結果から、SST の技法を用いたコミュニケーション教育は、グループで練習することを決め、さらによくする点を考えるなど、グループの相互作用を活用して行われることから、話題提供者、グループメンバーともに話題の共有、対応方法の学びといった共通した効果が得られると考える。また、話題提供者はプログラムの実施を通して、具体的なコミュニケーションスキルを理解することができ、スキルに対する自信も得られると考える。一方、グループメンバーは話題提供者が練習する際に患者役になることから、対象の理解がより得られると考える。このように話題提供者、グループメンバーが捉える効果の特徴を把握することで、学生の課題状況に応じた教育に活用していくことが考えられた。

今後の課題として、本研究で得られた結果は、1 回の実施によって学生が捉えた効果であり、実際の実習場面での効果は不明である。SST では獲得された新しいスキルが実際場面での般化し、持続するように課題が課される（西園他，2009）。今回は、実際場面での実行を報告するまでには至らなかった。そのため、今後は、実施回数や時期などを検討し、調査していくことが必要であると考える。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 3 件）

(1) 阿部智美 看護学生、看護師を対象としたソーシャルスキルズトレーニングに関する文献検討. 第 14 回北日本看護学会学術集会 2010.8.7　山形市

(2) Tomomi Abe Classification of communication skills in nursing: based on analysis of basic nursing skills textbooks and nursing communication skill assessment scales. 14th East Asian Forum of Nursing Scholars 2011.2.12 Seoul

(3) 阿部智美 ソーシャルスキルトレーニングを用いたコミュニケーション教育の有用性－グループインタビューを通して－. 第 12 回日本赤十字看護学会学術集会 2011.6.25　福岡市

６．研究組織

(1)研究代表者
阿部 智美（TOMOMI　ABE）
宮城大学・看護学部・助教
研究者番号：70347201

(2)研究分担者　なし

(3)連携研究者　なし